

日本の伝統衣装

—「花嫁衣裳（打掛）」の製作—

児玉愛子

岐阜女子大学家政学部生活科学科生活科学専攻
(2015年11月20日受理)

Traditional Kimono of Japan **—Fabrication Approach in UTIKAKE—**

Department of Home and Life Sciences, Faculty of Home Economics,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu Japan (〒501-2592)

KODAMA Aiko

(Received November 20, 2015)

I. はじめに

和服は日本の国に生まれ、長い歴史の中で民族衣装として伝えられている。また、伝統ある格調高いものとして今なおお衣生活において儀礼服や正装用として重要な位置を占めている。

女性の第一礼装である花嫁衣裳（打掛）を製作し、専門的な知識・技術の研鑽を行い、日本の伝統衣装や伝統文化を新たな目で見直し伝えていきたい。

1. 花嫁衣裳の歴史

古くは平安時代の上流階級から始まったとされている。「十二単」は今も皇室の御成婚時にお召しになる。

平安朝以来、花嫁衣裳に純白が貴ばれるようになった。古来日本では、白は太陽の光と考えられ、神聖な色とされていた。また、清浄無垢な純潔の色としていずれの家風にも染まる用意のために、白が婚礼衣裳の色とされてきた。

室町時代になって、足利幕府により礼道教育が始まった。小笠原流・伊勢流などの礼道が確立して婚礼の法式などが生まれ、婚礼の衣裳も定められた。この頃は幸菱文様（さいわいびしもんよう）の表着に白打掛が着用された。これが「白無垢」と言われるものである。

この時代、婦人は外出の際に小袖を頭から被く（かづく）ようになった。この風習が婚礼のしきたりにも定められて白の小袖を被くこととされた。これが次第に江戸時代の綿帽子（わたぼうし〈真綿で作る〉）、練帽子（ねりぼうし〈絹で作る〉）、幕末頃からの（あげぼうし〈角隠し〉）へと変化していった。

室町時代の白無垢はその後も受け継がれ、江戸時代は白か紅梅の綿入れと白の小袖、白の打掛が着用された。後期には下着を紅梅色としたり、打掛の裏や下着の裏に紅絹（もみ）をつけて吉事の証とした。婚礼を終えた後の「色直し」では、今までの白無垢を脱ぎ、婿から贈られた色物（赤地）の衣服に改めた。

明治時代には、黒縮緬紋付裾文様の振袖な

どに白羽二重の下着に角隠しという花嫁衣裳が一般的になった。

第二次大戦中、新郎は国民服に戦闘帽、新婦は上っ張りにもんぺ、防空頭巾携帯という粗末な衣服で挙式を行った時代もあった。

時代が進むにつれて、神前結婚式が主流となり、自宅結婚式は減少し、現在の様式へと変化してきた。祝宴をホテルや専門式場などで行うケースが増え、最近ではキリスト教式や海外挙式が増えるなど、結婚式のスタイルも多様になり、花嫁衣裳も和装・洋装ともに華やかさを増している。

今後、結婚式がいかに変化しても、歴史と文化の中で生まれ洗練されてきた日本古来の花嫁衣裳は、ずっと守られ続けていくだろう。

2. 打掛の歴史

昔は特権階級の女性が正装として着ていた。きもの上に打ち掛けて羽織ることから打掛と呼ばれ、白以外のものを総称して色打掛という。別名「搔取(かいどり)」とも呼ばれるが、打掛の裾が長いために袂を掻い取りながら歩くことに由来している。

安土・桃山時代の武家の女性は華やかな打掛を着ていた。江戸時代に入ると打掛は武家の正装とされるようになり、地白・地黒・地赤の綸子などが使われるようになった。

江戸時代、大奥に勤める上臈・中臈などの高位の女性が打掛を着た。内裏の上級女官や一般公家の女性も日常的にこれを用いた。

江戸時代後半では、遊女などが打掛を着るようになり、真っ赤な裾に厚みを持たせた華やかさが現在でも印象的である。

3. 打掛に込める願い

日本伝統儀式衣裳友禅保存協会副会長の松原様から、日本に数点しかない貴重な色打掛を見せていただきながら、作られた年代やそ

の製作者(職人)、伝統の文様、そこに込められた願い等の解説をしていただいた。

母もまたその母も

装いて嫁ぎ来し

女の歴史

「日本の八島の国は美しい大自然に育まれた平和な国です。春夏秋冬うつろいの四季が人を育て、文化を創り、芸術を遺しました。この国の人々は、大いなるものへ祈り、人の尊厳を敬い、儀式を通して節目を祈り、式をもって、人と人との契りを結びました。

式三献の儀、結婚式は結ばれる良縁の感謝と男と女とが結ばれる大切な儀式です。」

—日本伝統儀式衣裳友禅保存協会誌より—

日本伝統儀式衣裳友禅保存協会では、日本の儀式のため、日本人の結婚式の為に何をなすべきかと問いかけ、ひたすら「祈り」と「式三献の儀」の意義と意味を訴え、美しい友禅の打掛の花嫁を創ることが使命であると信じ、結婚を控えた男女とその両親、さらには婚礼衣裳を着付ける人への講演等普及活動をされている。松原様は、日本の伝統文化・技術を受け継ぎ、後世に伝えていく使命感が溢れてた。

II. 打掛の製作



図1 打掛でき上がり図

(1) 材料

金らん地（ポリエステル）…70 cm×8 m

裏地（ナイロン）…72 cm×8 m

新モス…20 cm×56 cm

三つ衿芯…並幅36 cm×11 cm

青梅綿…3包、真綿…1枚

(2) でき上がり寸法

＜でき上がり寸法＞		
名称		寸法 (cm)
身丈	丈	172
袖丈	丈	109
袖口	口	23
袖つけ	つけ	23
袖幅	幅	32
袖丸み	み	15
袖口ふき	ふき	0.8
ゆき	き	65
肩幅	幅	33
えり肩明	さし	9
くりこ	し	3.5
身八つ口	口	11
後ろ幅	幅	31
前幅	幅	25
おくみ下がり	がり	23
おくみ幅	幅	17
お合づま幅	幅	15
えりたけ	け	88
えり幅	幅	12
すそふき	き	6

(3) 裁ち方

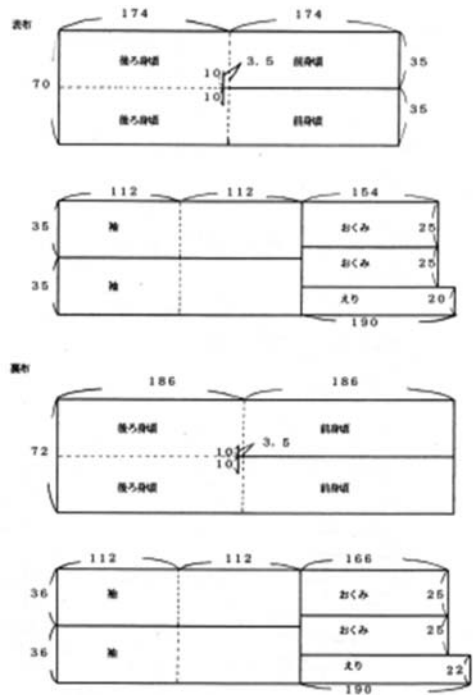


図2 裁ち方図

(4) 縫い方

- ①袖作り…袖口の裏打ち→袖口合わせ→袖口の留め→袖下縫い→丸みの始末→綿入れ→振り縫い
- ②表身頃作り…背縫い→脇縫い→おくみ付け→えり付け
- ③裏身頃作り…背縫い→脇縫い→おくみ付け→えり付け
- ④すそ合わせ、つま作り、すそ綿入れ
- ⑤表裏の中とじ
- ⑥えり下縫い、身八つ口縫い
- ⑦袖付け
- ⑧えりの中とじ
- ⑨すそとじ、仕上げ

・着物との相違点は、袖口とすそに「ふき」を作り綿を入れる。

1) 大づまの縫い方

- ①裏おくみのつま型を縫う。
- ②表と裏を中表に合わせて縫う。

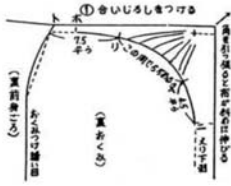


図3 つまのしるし付け

2) すそ綿入れ

- ①真綿をすその長さに伸ばして芯を作る。
- ②青梅綿を直径6cmになるまで巻く。
- ③かぶせ綿でくるむ。
- ④含め綿を作る。
- ⑤つま先に含め綿、すそにふき綿を入れる。

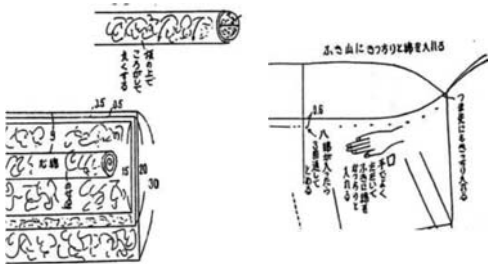


図4 打掛すそ綿入れ

III. 掛下の製作

打掛の下に着用するもので、掛下と呼ばれた。江戸時代には、打掛に豪華な模様や金箔を付けたので、掛下には綸子、縮緬などの柔らかい無地の布地が原則とされていた。現在は白の綸子が用いられている。

(1) 材料

- 無地 (ポリエステル) …2反
- 胴裏 (ポリエステル) …2反
- 袖口布 …20 cm × 56 cm
- 三つ衿芯 …並幅 (36 cm) 10 cm
- 青梅綿 …1包
- 真綿 …1枚

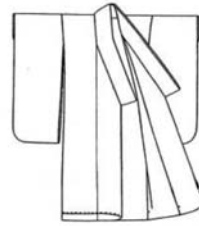


図6 掛下でき上がり図



図5 打掛完成写真

(2) でき上がり寸法

表2 掛下でき上がり寸法

<でき上がり寸法>			
名称	寸法 (cm)	割り出し	
身丈	172	打ち掛け-2	
袖丈	112	+2~3	
袖口	23		
袖付け	17		
袖幅	32	同寸	
袖丸み	15	同寸	
袖口ふき	0.5		
ゆき	64	-1	
肩幅	32	-1	
えり開き	8.5		
くりこし	3		
身八つ口	15		
後ろ幅	30	同寸	
前幅	25	同寸	
おくみ下がり	23		
おくみ幅	15		
すそふき	2		
えりたけ	85		
えり幅	11		

(3) 縫い方工程図

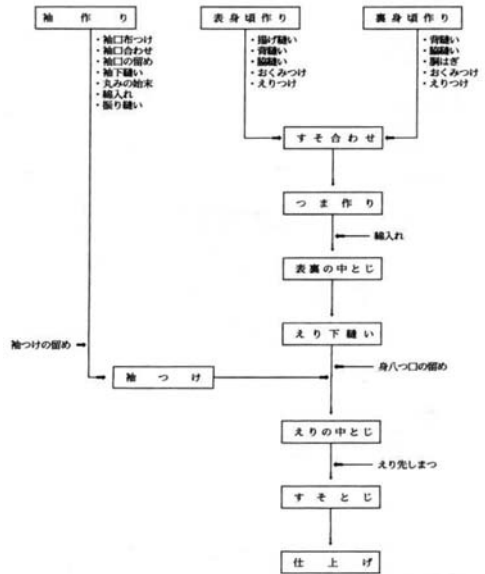


図7 掛下工程図

(4) 縫い方

- ①袖作り
- ②表身頃作り
- ③裏身頃作り
- ④すそ合わせ, つま作り, すそ挿入れ
- ⑤表裏の中とじ
- ⑥えり下縫い, 身八つ口
- ⑦袖付け
- ⑧えりの中とじ
- ⑨すそとじ, 仕上げ



図8 掛下完成写真

IV まとめ

私達の先人が長い年月をかけて日本の気候風土に適し、日本人の体型に合った衣服を考え染める人・織る人・仕立てる人の愛の形として現在の着物に完成してきた。そして、日本人を最も美しく装ってくれるのが着物であり、女性の第一礼装である花嫁衣裳（打掛）

である。

製作に当たり、(株)ブライダルポートワンの会長であり日本伝統儀式衣裳友禅保存協会副会長の松原様から「美しい日本の儀式」の講義を受けたことや貴重な打掛を見せていただけたことは、和裁を指導する私には大きな財産となった。また、伝統を守り、後世に伝えていく使命感を持った職人が身近にいらしたことは大きな力となった。

今後は大学で和裁と着付けを教えながら、日本の民族衣裳としての着物の良さを認識し伝統文化の後継者として自信をも持たせ、将来家庭科教師や和裁士、着付け師、着物コンサルタントなどのスペシャリストを目指す学生が多く育つことを願う。

参考文献

- ・婚礼衣裳 岐阜和裁専門学校
- ・打掛 日本伝統儀式衣裳友禅保存協会
- ・美しい日本の儀式 松原正美